

きざねのそと

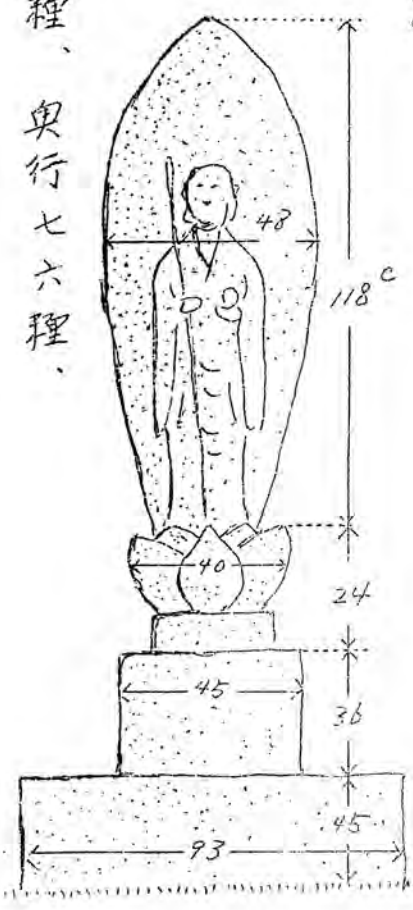
NO.57
月刊

第三輯 寺社誌 第一号
昭和廿八年三月一日発行 (非売品)
岡山県都窪郡吉備町東町一三五 宇垣方
吉備 觀 光 協会

○大蔵坊無量寺址

大内田の千手寺の西南、竹藪中に檀の大樹がある。その大樹のむとに一間年間に二間の坊址がある。ここに大蔵坊無量寺という寺坊があつた。創始を尋ねると昔奈良朝の佛教興隆時代の天平勝宝年間(710-755)に報恩大師が庄村の日差山に廿二坊といわれる山岳堂塔を紐連し轉染の美を誇つたが、後母相結く兵亂と、新しい宗教の執興によつて次第に衰亡の一途をたどり、ついに廢絶、或は退轉した。当坊は其の一にして永く千手寺の管理に属してゐたが修理のこともなく建物は甚だしく腐朽に委す状態であつた(第五輯道標篇参照) 昭和三十一年九月の大暴風に、ささえられ倒壊してしまつた。本尊阿彌陀如來は分二体の佛像と佛具全部は、いま千手寺に移されてゐる。境内は二畝歩ばかりにして南片隅に石地藏尊がある。地上高さ二百二十浬にして二段の角形台石に丸形六連辨、上向き台石を置き、その上に蓮辨片の石面に地藏尊を浮彫りしてゐる。右手に錫杖を持ち、左手に宝珠を戴いた立像である。二段の台石の表面に「元禄十一戊寅、則岩道用禪定、八月二日し。刻字が三列になつてゐる。

別に円形の石碑がある。直径七五浬にして、周囲に九浬幅の縁を有し、中央に釈迦如來の梵字、キリクを刻み、その下に「室永三丙庚天十二月二日、智清」とある。北側に二小祠がある。間口六。浬、奥行七六浬。



同形にして流造、平葺葺屋敷である。右を皇太后大夫天神といひ、左を大蔵大明神といふ。皇太后大夫天神はこの地の庄屋公森家の遠祖皇太后大夫藤原中納言俊成を祭祀してゐる御宮である。皇太后大夫大明神縁起に「祭神は藤原中納言俊成卿である。卿は安徳、高倉兩帝に仕へ、皇太后大夫にありたが、平氏滅亡後備中回平田村(今倉敷市)に隠棲して号を樂隠といひ、この地に病没した。その十三世の爲俊に至り、慶安三年三月、父は病死したので家財を売却して母と共に都宇郡大内田村の庄屋森作右エ門のむとに縁づいた。この時姓を公森と改め林右エ門を襲名した。故に平田村の地を後世皇太后宮幸田と稱し今では訛つてカウタイコクと呼んでゐる。爲俊は大内田に住した大蔵坊の庵のほとりに宮を建てて先祖俊成卿を奉祀し、皇太后大夫天神と崇め奉つた。」

(皇太后大夫は皇太后宮の長官にして、皇太后大夫とは先帝の奥方に仕えた役人である。)

大蔵大明神にフソて棟札に
寛保元年辛酉星籠月造立 施主 中野小十郎
奉新造立 大蔵大明神 宝殿 施主 公森忠兵衛
新殿 文化十三年丙子十一月十九日甲子也 願主 公森忠兵衛
大蔵大明神者当坊鎮守其先中野小十郎宝殿雖奉造立浅少也因口口歳次文
化丙子今宝殿奉造立者也村父有傳謂大蔵大明神者本邑最初鎮守云云

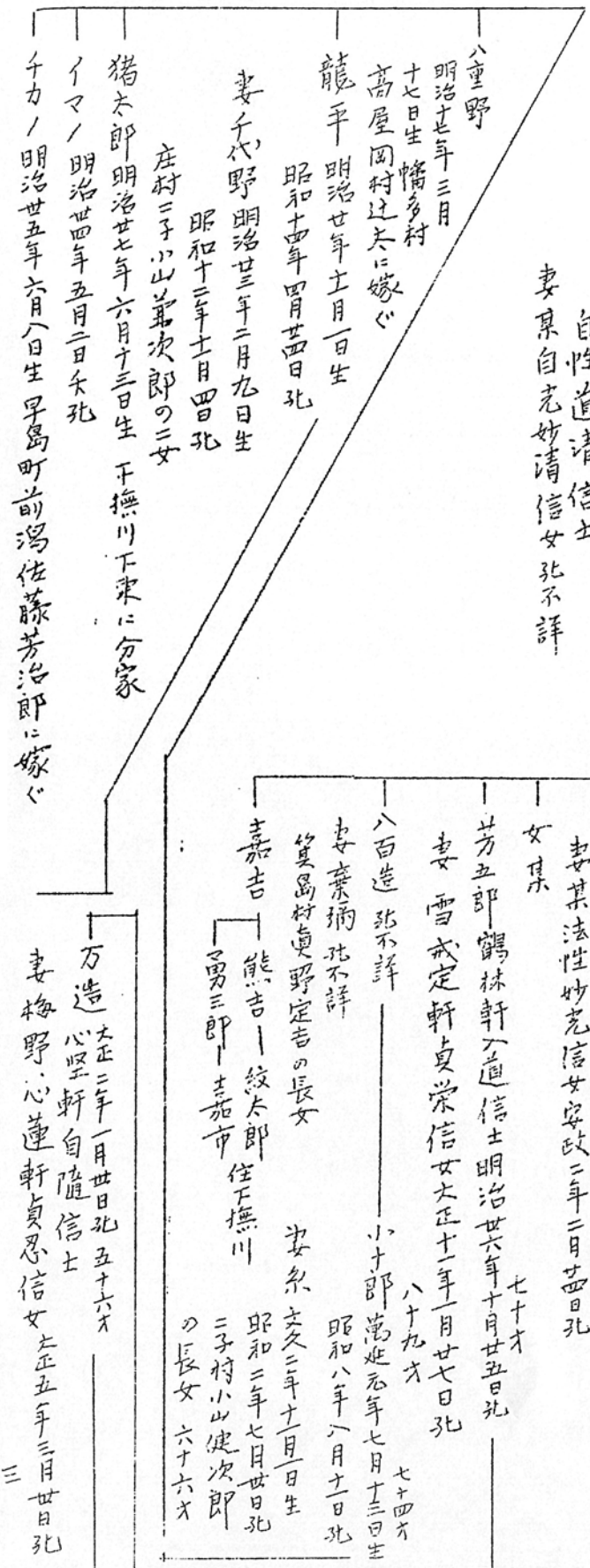
とある。始めの造立は寛保元年(1780)に新殿は七十六年日に造立したものである。棟札に本村の最初の鎮守と記してあるのが新造は寛保以前と思はれる。日差山諸坊中に大蔵坊無量寺、皇太后坊の名がある。鎮守としてここに遷祀し後在草庵を建てて法燈を傳へたのである。

○大内田は地形上から観察して相当古くから文化が栄達した土地で、石津や坂本には貝塚の遺蹟が発見され、いふので、数十年前は山裾に泊り、海浜が迫り、千手寺の前あたりは波静かな入江になつて、人類の生活に適した處であつたろうと考へらる。そこでここには先住民族が聚落して、漢をこゝとしたものであろう。

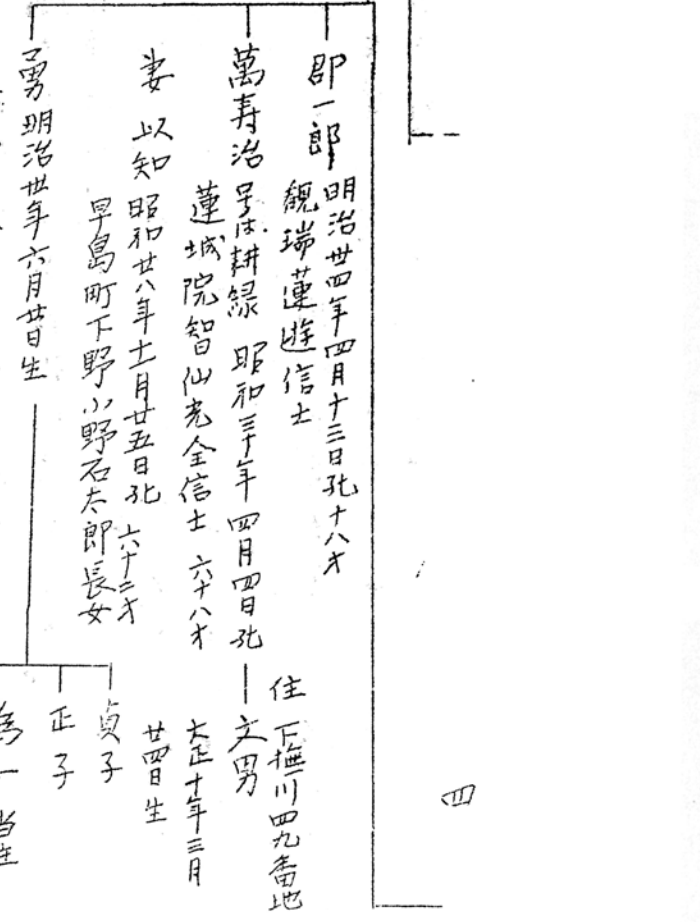
大蔵大明神を再建した中野小十郎はこの地の旧家にれて五六四番地に三畝歩あまりの宅地がある。中野家は昔妹尾の辻といふ處にあつた三摩山蓮華寺の増設であつたが大災のため堂塔は悉く灰燼に歸した際、寺に保管中の中野家の古文書什物など失つたといふ。昭和八年頃、下撫川に移り、子孫は、いま数家にのみ残してゐる。宗家筋の中野氏は北海道に任してゐる。

中野小十郎 一 茲三郎 某一又八 三郎北海道三移川

天明五年七月六日死
自性道清信士
妻某自老妙清信女死不詳



哲太 大正三年十一月十五日生 下撫川一八五番地に住す
昭子 大正五年六月四日生 茶屋町岡本佳吉の長女
登代子 大正七年四月廿日生 東京都板橋区毛利登に嫁ぐ
深治 大正九年十一月五日生
和三郎 大正十五年五月廿八日生 岡山県津島町氏の養子



○荒神宮と千蔵坊止

大内田の路を、左側の削り取られた小高い丘の上にそのおとがある。むと一草庵があつたが、いつの頃か廢絶の運命をたどり、本尊親在音菩薩は、いま千手寺の觀音堂に奉遷してゐる。ただ遺蹟として往時をしのぶ石地蔵尊が、小堂に安置されてゐる。傍にはコンクリートの塚に、つままれて荒神宮の一小祠がある。華表があつてその傍の無縫石の碑に

「堅牢地神 天保九戌戌年二月九日。また保んで同質同形の碑に
水神 大正六年十月吉日。の文字が彫つてある。この千蔵坊といふは大蔵坊無量寺などと同じく、もと日差山廿二坊の一で、退轉してここに祭祀したものである。近年道路改修の際、小丘を切り崩した處、数多くの人骨を掘り出したことがある。右老の話によるとこの人骨は、いづれも骨格が還ましく、殊に脛骨は長かつたといふ。年代はもとより臆測はゆるさないが、昔大内田住民のなきがらを埋葬した墓地であつたことは確實である。

○三摩山蓮華寺止

吉備所と福田村の境をなしてゐる妹尾の辻といふ處に、往昔蓮華寺といふ寺坊があつたと傳へてゐる。庭瀬から妹尾へ通ずる街道の妹尾崎から右側

の尾根を辿つていくと毀れた土塚に囲まれた牛頭天王を祀る無縫塔がある。牛頭天王はいうまでもなく素盞鳴命を祭るもので、悪疫の神として崇信するのである。ここから数歩にして墓地に入る。ここが俗にいう妹尾の辻である。今は寺址としてなにより一つの遺蹟もなく拓かれて山畠になつてゐる。牛頭天王の墓なら右の細道を下ると竹藪があつて、この附近の地名を俗に「てらう」としてゐる。踏傍の山裾に直径一〇〇程ほどの井戸がある。井戸の口より泉水にして常に清冽な水を湛えてゐる。往昔寺に使用されたものであろうか。いまではこの附近の住民が日常の飲料水として、これを汲んでゐる。蓮華寺は傳える所によると往昔日差山諸坊の一といわれ衰微とむにこの地に移つたが、その年代は全然文献に徴するものはない。中世期頃に火災に見舞はれ再興することもなく、佛像、什器などを千手寺に合併して發寺にされたという。地形上の條件から推察して往昔寺坊のあつた跡であることが想像される。

○ 毘沙門堂址

塚山の山中永坂という所に、なだらかな丘陵がある。俗に毘沙門山と俚人はいつてゐる。もとここに毘沙門天王を祀る御堂があつたからである。この毘沙門天王はいつ時代に如何なる人が祭祀したものであつたか。レは、本堂、庫裡などの建物が崩れ築泥塚をめぐらした淨地であつた。レは、歳月は流れて明治の中期には傳統は崩れ建物も頽廢したので取り毀ちその遺蹟は永く礫石のみ寂しく残つてゐたが、レまでは全部他に運ばれて跡形もななく、ただ誰木が生ひ茂つてゐるだけである。この附近には一千年以前と思はれる古墳二、三基あり、往年祭掘されて曲玉、高杯、右刀など数多の副葬品を集め、この御堂に納めていたが、或る年この地へ岡山の蓮昌寺の開帳が催された際、建物がたたく朽壞してゐるので盗難を憂へ本尊并に佛具一切と保存中の古器物全部を蓮昌寺へ持ち帰つたといふことである。レは、どうなつて

○ かきなレ堂址

地名には掛無堂の文字を用いてゐる。所は日畑東組の納所地内である。昔は撫河郷の内にて、いまは撫川へなつかりの文字が使はれてゐる。正倉院の古文書によると、中国大陸から帰化人がここに住居して文化の開榮に努めたことが載つてゐる。従つてこの地に佛教全盛時代、平地伽藍が建立されてゐたのであろうことは、農耕中に往々古瓦の破片を採掘することがある。地域は東西約一〇〇米、南北約一五〇米に亘り、北隣りに「むせし」といふ地名がある。むせは無曾にして、墓地を意味するものといわれ、レは、火葬場のあるところである。西隣りの地名を「ぶつれよう」といふ。佛生田と書く、これは誕生とか灌佛会と相通じ、伽藍のあつたことに因縁が深い。レは、レの寺坊の法統はレからなつたが、昭和七年二月に住民が一三四番地内の田圃なら古瓦を掘り出したことがある。その一つの田圃は東山の真如院に保存してゐるといふ。又東南の隣地一四〇番地の田圃から須恵器、土師器などの破片を十餘番、丸巴瓦二個も續いて出たという。真如院保存の巴瓦は当面の直径十八種、内區は径六種、それ九個の著大な蓮實を含めた子房を中心にして、十六の蓮瓣を繞らレ、珠文帯を缺ぎ、外縁は二重の同心円の外に、幅一、五種の鋸齒帯をめぐらしてゐる。これは奈良朝初期のものらしく、この時代にすでに納所には伽藍が存在してゐたことを立証する好資料である。

○ ほうまんじ

掛無堂の東に重蓮寺という地名がある。また南に接して中撫川の地内に法万寺という田圃がある。レは、レの地名なら推察して往昔伽藍のあつた遺蹟ではなかつたと思ふ。昔古瓦の類を耕作の時掘り出したことかあると、古瓦は話してゐるが、その遺物は散逸して御土ではみられなかつた。

○ さいおうじ止
 定坑の果道の南、庄村に接した田圃の地名を西王寺という。往昔寺坊のあつた處と思われ、いまは全くそのあつた處もなく礎石なども発見されな。古老の説に昔二米四方位のお盛りがあつて雑草が繁つてゐたが、つれぬ田圃となり、いまは澁沢鉄工所の敷地に存してゐる。

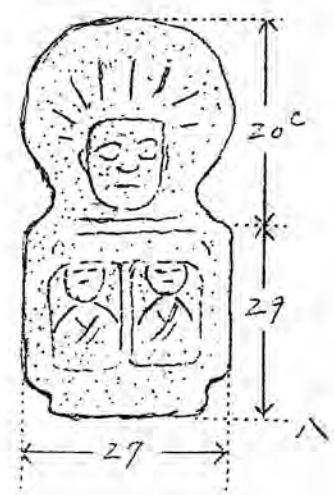
○ がんじようじ止
 中撫川の土保田に嚴淨寺という田圃がある。昔寺坊のあつた所なので、その名が起つたのであろう。この寺は、いつ時代に興り、かゝつて栄えていつ時代に廢れたものか何等の文献もない。田のなかに二米四方ほどのお盛りがあり人骨を容れ埋葬したらしい骨骸が掘り出されたという。昔は相当地さのお盛りであつたが、耕作毎に崩されてしまつた。昔寺の墓地と推定され、寺址であることは實証せられる。一説には、いまの観音院はここにあつた寺坊を移したといわれ、その以前は日差山諸坊が遷轉した際の一坊と傳えられてゐる。寺址篇は一先づ以上で終ることとする。

△ 露石佛篇
 中田の三休石佛

○ 学校の北裏、三反地樋門の傍にある。大正五年五月に樋門改修の際、川底から七個の石佛と、八個の伽藍塔の破片を掘り出したことがある。これは昔ここに寺坊があつて、その墓地たつたと傳えられ祭祀したものである。これ以来この石佛を信仰すれば諸病に靈験があると云ひ傳えられ、急に参詣者が多く、一時盛況を呈した。が次第に衰え、現在では田町部落の人々によつて供花香煙の絶えることなく祭られてゐる。
 石佛は、此も豊島石造りにして埋藏甚だしく、彫刻の線も浅くなつてゐる。中央の三休石佛は他のものよりも大きく背光を有し、腹部に二つの石佛を彫つてゐる特異なものである。

○ 思ふにこの地には寺址らしい形跡はなく、川上押レ流され、ここに沈下したものでないかと考へられる。石佛をみるに全体に磨滅の程度はげれく、これは流轉によつて生じたものであ。もしここに寺坊があつたとすれば、寺に關係した地名が少しでも残つてゐなければならぬのに、それらしい地名が存してゐないことである。

三休石佛像



○ 關迦地藏尊

○ 小学校の西裏の田圃道を北へ、用水路に沿つて一軒ほど、西際に俗に關迦へあかへ地藏という露石佛が一基安置されてゐる。敷地は六十平方米ばかり、周囲に石がきざある。明治の末期頃には地藏堂もあり参詣の老幼男女で發光した。が次第に寂れて、いまは松樹二株と雑木が繁茂するなかに東面して石地藏尊のみが立つてゐる。その銘に「元禄五年二月廿日 為大飼長太郎童子」とあり。これは川入の犬飼系統の祖先ではなからうか。幼少にして死去したので菩提のため建て置かれたものである。俗に「あかじぞう」と呼ばれその起源はわかりな。が漢字の關迦に通じてゐるようには思はれる。關迦とは佛前に手向ける清水のこと、小川に近く水を献げたので起つたものである。現在は手向ける人もなく、ただ黙々、ほゝえまし、顔をして三百余年、姿の變遷をみる御座るのである。

○ 地藏尊は高さ六三程、三段の台石の上に、高さ一六程の蓮瓣上向の台座を置き、更に蓮瓣片に刻んだ尊像、高さ九一程のものを安置してゐる。

○ 大ぬ田の地藏尊

○ 矢部ヶ鼻から大ぬ田本村へ通ずる辻り場という處の路傍にある。二段

の台石に高さ一ニの種の蓮瓣片に地蔵尊の立像を刻んでゐる。西脇に下俗
久 老畑吉治良、同事 おふいし。とあるも建てた年号は存ないが、雨露に
さらされてをり、徳川幕末の頃と思はれる。

吉治良は、また内田の四四番地に住する老畑盛男の先祖にして、深くは
言宗を信じたので、ここに地藏尊を祭り、部落の安全を祈つたのである。

○

日親堂

(第三輯堂宇篇の続き)

白山の中腹にあり。参道は八幡神社の裏手、共同墓地の細道を縫つて登る
と本堂の前へ出る。

日新堂は昭和の初年、川入の高塚新吉という人が、日蓮宗を信迎し一字
を建立せんと志し、淨財を募つてここに創建したのである。本堂の前に
「南無妙法蓮華經」の大石碑が建てられてゐる。これは新吉の歳の鉄蔵が
アメリカに滞留中第一次世界戦争が勃発し、彼我戦病死者の忠魂を弔わん
がため、アメリカ金金を旅行して採集した小石に六万九千三百八十四字の
法華經を一字一石に祈願をこめて、三ヶ年余の歳月を費して書寫し、漸く
成就したので、その經石を帰國の際に携えて持帰りこの石碑を建て碑下に
納めたものである。

其後新吉夫婦は他界し、その跡に当る未亡人の河西 庄が尼となつて法
灯を継ぎ、堂宇を兼收して日夜佛道三昧に入り、極樂淨土の道を歩んで、た
だ先年八拾歳でなくなり、いまは無住のまゝ、にて荒れ果てゐる。

日新堂の名命は新吉が常に日親上人を崇信してゐたので、上人の尊号に
因んでつけたのである。本尊は即ち日親上人の本像を安置してゐる。これ
は備後國光照山常國寺から譲渡されたものであつたが、いまは紛失して所
在はわからぬ。大石碑の台石には自然石の巨岩數十個が使用されてい
る。これは入道台、或は附近に散在してゐる古墳の家石を取り毀れ、多く
の工夫をしてここに集積したのである。堂の背後に二基の墓石がある。

銘に 眞淨院日法大徳

高塚音吉の次男当山創立者新吉七十歳
昭和十二年五月廿九日

淨信院妙敬日良大姉

高松町中島 黒宮吉左衛門 妹 良

この左側に

妙法

詮量院義道日尋信士

明治二十三年庚申七月廿五日

本拜院妙遠日悟信女 (蓮修)

俗名 高塚音吉故行年五十四歳

大題目石碑の傍に地上高さ一。六種、幅ニ七種、厚さ二十種角にして上部
に笠石を置いた石碑がある。

表面

妙法華

一万部

六親眷属有縁無縁

右面

寛永十六年

左面

霜月十五日

雨露にさらされて文字は磨滅し、わかたに判読し得られる。寛永は昭和世
七年から遡る三百二十三年にして、金石文として、吉備町内では古くも
のである。この石碑はもと八幡山(いまの八幡神社の西隣、松林の繁茂す
る小丘)にあつた。ここは八幡宮の別当長國山松山寺という天台宗の寺院
があつた所で、当寺は日蓮宗に改宗し庭瀬の卯内に移轉し、いまは長國山
と衆院になつてゐる。永く旧場所にあつたが、日親堂創建の際に現地へ移
したものである。(第三輯 寺院篇 大衆院参照)
堂内には附近の古墳から出た貴重なる古器物が数点保存されてゐたが
責任ある管理者がなつたため一物をも残さず散逸したのは最近のことである。
(おわり)この項未完

登録商標



油 撫川
三三 栗原仙太郎商店

電一七一番

鮮魚・酒類・氷卸小売

魚進 岸本商店

吉備局 電120,乙

本店 西花尻・支店 本町